

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

⑤7

愛染山に登ってもう六十年近くになるだろう。住田町立五葉小学校の子どもたちを五、六人連れていった。途中クマの糞があり、木の幹には生々しい爪あとがつけられていた。

私は昭和二十五年三月に盛高等学校を卒業し、四月から五葉小学校に教員として赴任することになった。十九歳であった。この年の十月十日は住田町の上有住に鉄道が初めて通った記念すべき日であった。地域あげての祝賀行事が今なお忘れ得ない。

当時の五葉小学校は寒倉公民館の場所にあり、茅葺きであった。職員は校長、教頭、四人の女性教諭、それに私の七人の職員。教室は三つで、五

十人を超える子どもたちでいっぱい。教室が足りずに複式学級を余儀なくされていた。隣の教室からは子どもたちの声が響いていた。

五葉小学校が独立した昭和二十六年に上有住の中坪(なかぞね)に校舎が完成し、寒倉からそこ

その後の教員生活を送る原点となっている。教員としての有り様、子どもたちの育成、地域の人たちとの触れ合いを、実践の中から多く学んだ。

あの時、愛染山の頂上から手を伸ばせば届くように間近に見えた五葉山は、私にとって登りたく

男子生徒が一人であって、もそれほど気にはならなかった。

高校卒業後、八年か九年が経っていただろう。音楽クラブの二年後輩であるA子さんが私たちの住む上有住地区に嫁ぐ花嫁の付き添いとして同行してきた。演奏や合

悲しい思い出の山

住田町上有住 松田 英三

までの一き以上の道のりを子どもたちが机やイスを運んだ。真冬の道は雪で覆われ、机やイスを滑らせて運ぶと、新校舎に着くころにはすっかり立派になっていた。

最初の赴任地・五葉小学校で過ごした三年間は

ても登れない山となった。

盛高校三年生の時、合奏・合唱を活動の主体とする音楽クラブが結成された。全体部員数は二十一人で、女子生徒二十人、男子生徒一人。その

たった一人の男子生徒が私である。

高校入学当初から教師になることを目指し、学校には朝一番早く行き、授業が始まる前三時間くらいオルガンの練習をしていたほどだったから、

住田町の根岸分校から

五葉山の稜線をはっきりと見ることができた。ここに勤めていたときに子どもたちによく言った。「五葉山のように大きく、優しく、立派に、そんな人間になれよ」と。風や雪、雨にも耐えて咲き誇るシャクナゲ、見事な枝振りを魅せるハイマツのように美しく、たくましく育ってほしいと願うからだ。

夢と希望に向かって走っていた美しく登った青春時代、そして喪失感と無常感を突きつけられた青春時代。遠くから望む緩やかな五葉山の稜線は、そんな思いを包んでいる。

♪流れて深きさかり湾
響えて高き五葉峰

【執筆者プロフィール】一九三一年生まれ、住田町上有住在住。元教員。今年三月まで上有住地区公民館長、上有住小学校区コミュニティ推進協議会長を務め、地域の教育振興運動、地域おこしと取り組んだ。

五葉山



住田町上有住両向地区から望む五葉山の稜線